

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
稲垣 智成 委員長

国際基督教大学図書館 長濱峻平

2018 年度私立大学図書館協会海外認定研修報告書

1. 調査の概要.....	1
2. はじめに.....	2
3. 見学の目的.....	2
4. 訪問先図書館の概要.....	2
5. 訪問の記録.....	3
6. 考察.....	7
7. 日本の大学図書館への応用.....	8
8. おわりに.....	9
9. 参考文献.....	9

1. 調査の概要

(ア) 調査・研修のテーマ

ニューヨーク公共図書館 The Stephen A. Schwarzman Building 見学報告

(イ) 訪問日

2018年7月13日(金)

(ウ) 訪問先

ニューヨーク公共図書館 The Stephen A. Schwarzman Building (アメリカ)

2. はじめに

個人でのニューヨークへの旅行の際に、ニューヨーク公共図書館の一つである **The Stephen A. Schwarzman Building**（以下 **Schwarzman Building**）を訪問し、館内見学ツアーに参加する機会を得られたので、ここに報告する。

学生時代に、菅谷明子氏の『未来をつくる図書館－ニューヨークからの報告－』を拝読した。ニューヨーク公共図書館の様子が紹介されており、充実したサービスの数々と、図書館を利用することで人生が拓けたニューヨーク市民のエピソードに、図書館という施設の可能性と魅力を感じた。それ以来ぜひ訪れてみたいと思っていたところ、今回ついに機会を得て、訪問することとなった。

3. 見学の目的

ニューヨーク公共図書館は、市民からこよなく愛される図書館である。上述の図書には、図書館を愛する多くの市民や民間企業からの経済的支援を含むサポートの上に運営が成り立っている旨が紹介されている。多くの図書館で予算や人員が削減されている今、今後の図書館運営を考えると、利用者のサポートはますます必要になってくると思われる。サポートを得るためには、利用者に図書館を理解していただき、図書館を愛していただくことが重要だ。ニューヨーク公共図書館が市民に愛される要因を探り、人々から愛される図書館づくりのヒントを得ることが今回の見学の目的である。

また、ニューヨーク公共図書館のうち **Schwarzman Building** と **Schomburg Center for Research in Black Culture** では定例で館内見学ツアーが開催されているため、海外の図書館見学に慣れていない人でも、比較的容易に参加することができる。私自身、これまで個人的に海外の図書館を訪れたことはあったものの、スタッフの説明を受けながらの見学は、今回が初めてであった。海外の図書館を調査するにあたり、このような参加しやすい見学を経験することは、必要な段階かと思う。この報告書が、これからニューヨーク公共図書館、さらには他の海外の図書館の見学を考えている方の参考になれば幸いである。

4. 訪問先図書館の概要

Schwarzman Building は、4つのライブラリーと88の分館から成るニューヨーク公共図書館のうちの一つで、中でも中心的な機能を果たすことから、**Main branch** と呼ばれることもある。5th Avenue と 40 Street から 42 Street にかけての区間が交差する、マ



ンハッタンのほぼ中央に位置する（図 1）。

ニューヨーク公共図書館が誕生したのは、19 世紀末である。当時ニューヨークには、アスター図書館とレノックス図書館という二つの個人図書館が存在していたのだが、どちらの図書館も財政難による存続の危機に直面していた。そのような折、ニューヨーク州知事を務めた Samuel J. Tilden の遺産の補助を受け、1895 年に二つの図書館は統合し、ニューヨーク公共図書館として生まれ変わる事となった。10 年以上の建築期間を経て現在の場所に建物が完成し、1911 年 5 月に開館された。

図書はもちろん、電子図書、DVD や CD、写真や地図からなる蔵書は、ニューヨーク公共図書館全体で、約 5,500 万点にもなる（2017 年度統計）。Schwarzman Building には、中世の手稿や日本の絵巻などの貴重な資料、ベースボールカードなどのユニークなコレクションを含む、約 1,500 万点のアイテムが所蔵されている。

Schwarzman Building は、地上 3 階、地下 1 階の計 4 フロアから成る。館内には、Rose Main Reading Room をはじめとした複数の閲覧室、地図のコレクションルーム、貸し出し用児童書を保管するチルドレン・センター、著名なコレクションを展示するギャラリー、オリジナルグッズを販売するライブラリー・ショップなどがある。

5. 訪問の記録

図書館がある 5th Avenue は高級ブランドが立ち並ぶ世界有数のショッピングエリアとして有名であり、訪問当日、図書館周辺も多くの人々や車が行き交っていた。図書館の西側にはブライアントパークという公園が隣接しており、思い思いの時間を過ごす人々で賑わっていた。ちなみにブライアントパークおよび図書館は、ニューアーク国際空港から市内に向かうエクスプレスバスの降り場の一つとなっている。ニューヨークを訪れる多くの旅行者にとっての玄関が図書館なのである。

当日は、午前 10 時 50 分ごろに図書館に到着した。早速驚いたのは、観光客の多さである。多くの観光客が、入り口前の階段やシンボルでもある 2 体のライオンの像の前で写真撮影をしていた（図 2）。ここまで観光地化している図書館というのは、日本国内だけではなく、世界の他の図書館の中でも珍しいだろう。私はかつてオーストリアの国立図書館やスウェーデンのストックホルム市立図書館など、世界的に有名で、比較的観光地化している図書館を訪れたことがあるが、いずれもこの図書館ほどの賑わいではなかった。

ちなみに図書館入り口のライオン像は 1911 年の図書館開館当初からこの場所に配置されている。設置当初は前身の図書館名にちなんで Leo Astor、Leo Lenox というニックネームで



呼ばれていたが、1930年代に当時の市長によって、経済危機を乗り越えるための願いをこめ、Patience（忍耐）とFortitude（不屈）という呼び名に変更された。ニューヨーク市民や観光客に大人気で、今ではニューヨーク公共図書館の公式マスコットキャラクターとして用いられている。

館内に入ると、警備員による荷物の検査を待つ列ができていた。日本では一般的ではないが、

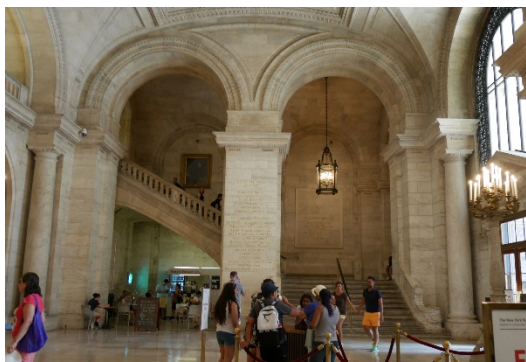


図 3 Astor Hall

ニューヨークでは美術館や展望台など、著名な施設に入るときは必ず荷物の検査が行われる。自由に出入りができるイメージがある図書館でもこのような検査が実施されているのは意外であったが、観光客がこれだけ多いとなると必要なのだろう。

図書館の入り口のホールはAstor Hallと呼ばれている。天井が高く、複数の太い柱とアーチから成る重厚な大理石の空間は、図書館というより遺跡のような様相である（図3）。

早速入り口左手のインフォメーションカウンターでツアーへの参加を申し込み、参加証であるTOURと書かれたシールをいただいた。

Schwarzman Buildingでは、月曜日から土曜日までの午前11時と午後2時の2回、英語による無料の館内ツアーを実施している。日曜日は14時からの回のみ実施しているが、7月と8月の日曜日は休館のため、ツアーは行われない。公式ウェブサイトやガイドブックによると、1回のツアーにつき先着の25名のみ参加できるとのことだったが、私が参加した日は40～50名の参加希望者が待機していた。参加

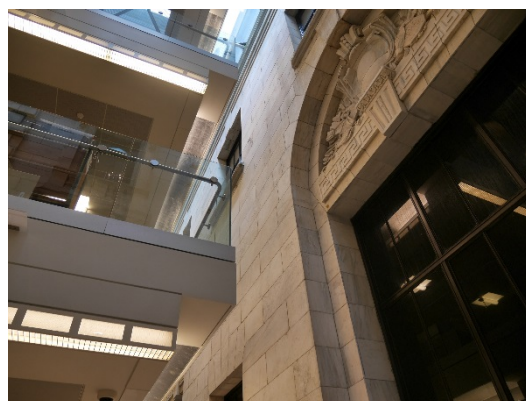


図 4 新旧の建造物の融合

できるのか不安ではあったが、時間になると2つのグループに分けられ、それぞれにツアーガイドがつく形で、私も含め待機していた希望者の全員が参加することができた。

ツアーは1階のBartos Education Centerから始まった。ここにはシアターがあり、ニューヨーク公共図書館の歴史やコレクションについてのフィルムを鑑賞することができる（ツアーには含まれていない）。この場所で説明されたのは、建物の中に建物があるという特殊な構造についてである。上述のとおり、Schwarzman Buildingは1911年に開館されたのだが、当時の建物がそのまま残っているわけではなく、度々改修が施されている。この空間では古い建造物の中に新しい建造物が造られ、新旧の建物が融合している様子が見学できた（図4）。Astor HallからBartos Education Centerへの通路脇には、1911年建築時の壁が一部現存している（図5）。

続いて案内されたのは、1階のDeWitt Wallace Periodical Roomだ。建築物が描かれた

壁画や天井の彫刻、シャンデリアなどの装飾がとても美しい（図 6）。ここでは新聞および雑誌が提供されている。こちらの資料は開架されておらず、隣接した部屋に資料が保管され、カウンター越しにスタッフから提供されるようになっている。そのスタッフの部屋の隣には調査研究を行う利用者のための予約専用の **Research Room** があり、静かな環境で集中して研究ができるようになっている（図 7）。

廊下の装飾も美しい。壁は大理石、天井は石膏でできているとのこと（図 8）。

3階に上がると、**McGraw Rotunda** というホールのような空間がある（図 9）。図書館でありながら、夕食会やカクテルパーティーなどにも利用されることがあるらしい。壁には4枚の大きな絵が描かれている。これらは **Edward Laning** による **The History of the Recorded Word** である。タイトルの通り、人類の言葉の記録において主要なできごとが描かれている。1枚目はモーゼの十戒の石版、2枚目は中世の修道士による写本、3枚目は **Johann Gutenberg** の活版印刷、そして4枚目は **Ottmar Mergenthaler** と彼が発明したライノタイプである。ガイドの方が、「5枚目はスティーブ・ジョブズが描かれると思うわ」と参加者の笑いを誘っていた。最近夜間に天井の一部が剥がれ落ちる事故があったらしく、



図 5 現存する 1911 年の壁（最下部）



図 6 DeWitt Wallace Periodical Room



図 7 Research Room

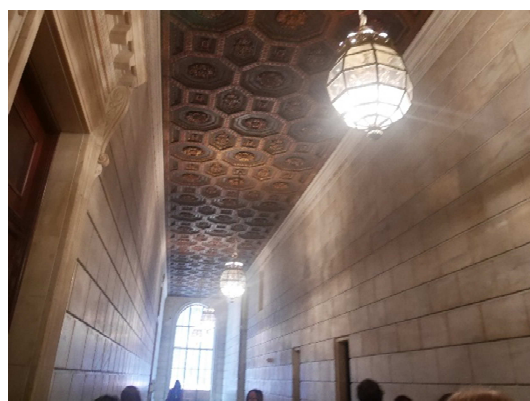


図 8 装飾が美しい廊下

修復工事が実施されていた。

McGraw Rotunda の北側には、400 名以上の著名な作家の図書や原稿を収集した Berg Collection がある。所蔵資料の利用はもとより、室内に展示してある Charles Dickens が使用していた机と椅子を一目見ようと来館する訪問者も多いとのことだった。

McGraw Rotunda の西側には Bill Blass Public Catalog Room がある (図 10)。この部屋の机にはデスクトップ型の PC が設置してあり、利用者は電子資料を閲覧することができる。また、レファレンスサービスもこちらの部屋で受けることができる。

Bill Blass Public Catalog Room を抜けると、サッカー場ほどの幅をもつ大きな閲覧室がある。Schwarzman Building のメインの閲覧室、Rose Main Reading Room である (図 11)。ダイナミックな天井画が美しい。閲覧室を真ん中で区切るのは、資料の受け取りカウンターである。Schwarzman Building の資料の多くは、ブライアントパークの地下に造られた書庫 Milstein Stacks に収納されており、利用者の注文を受けたスタッフにより出納される。出納された資料は、2016 に新しく導入された Book Train によって運搬される (図 12)。上りと下り、水平移動を繰り返しながら、950 フィートの距離を 5 分で移動する。注文してから 10 分ほどで利用者の手元に届くという。

以上のコースを 1 時間程度で巡り、ツアーは終了した。ゆっくりとした丁寧な英語でのガイドだったため、英語が不得意な私でもそれなりに説明を理解して楽しむことができた。



図 9 McGraw Rotunda



図 10 Bill Blass Public Catalog Room

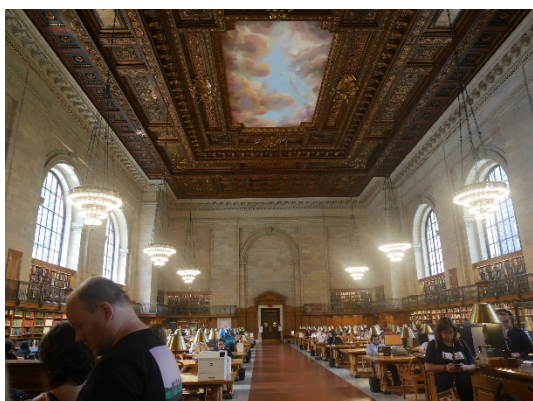


図 11 Rose Main Reading Room

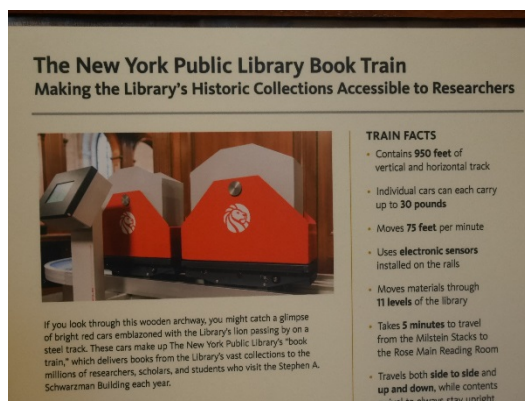


図 12 Book Train

ツアーのコースには含まれていないが、地下1階には Children Center があり、貸し出し用の児童書が配架されている。地上階の重厚な雰囲気とは違い、ぬいぐるみが置かれていたり、絵本のようなかわいらしい壁紙が貼られていたり、子供たちが気軽に入室して読書を楽しめるような空間だった (図 13)。テレビゲームが設置されているのも、日本国内ではあまり見



図 13 Children Center

かけない、アメリカらしい光景であった。Children Center は、A.A. Milne が童話『Winnie the Pooh』を書くきっかけとなったとされる、いわば「本物のプーさん」のぬいぐるみが展示されていることでも有名である (図 14)。



図 14 Winnie the Pooh のモデルとなったぬいぐるみの展示

6. 考察

上述の館内ツアーおよび個人的な館内見学をふまえ、ニューヨーク公共図書館が市民から愛される理由について、以下考察を試みる。

まずは空間としての魅力である。建築そのものが外観・内観ともに非常に魅力的であるため、人々を惹きつける。

次に国内外の人々への魅力の発信だ。利用者である市民はもちろん、館内ツアーの実施をはじめ、入館時の検査の実施、オリジナルグッズショップの運営など、私のような旅行者を受け入れる体制も整っている。既述したように、これほど観光客が訪れる図書館は世界でも珍しいと思われる。国内外の人々に魅力が発信され、知名度が向上し、羨望の対象となることは、市民が自らの図書館を自慢や誇りに思うことにつながるだろう。

そして、魅力的なコレクションである。一般的な図書や雑誌はもちろん、ベースボールカードなどのユニークな品から、世界的に著名な作家の原稿まで、ありとあらゆる貴重な資料を所蔵している。資料は図書館の根幹であるため、充実した資料は当然利用者を惹きつける要因となる。

最後に、館内に設置されていた、工事のお知らせの掲示物を紹介したい。3階の天井の一部が落下したことは既に述べたが、それを受けてか、3階の一部で天井の修繕工事が実施されて



いた。そこには注意を促す掲示物が設置されており、“This area is being improved for your future enjoyment”（このエリアは、あなたの未来の楽しみのために改修中です）と書かれていた（図 15）。天井の落下、そして館内の工事という利用者にとっては好ましくない状況を前向きに伝える姿勢に好感が持てた。このユーモアと親しみやすさも、図書館が愛される要因の一つなのではないだろうか。

7. 日本の大学図書館への応用

アメリカと日本、そして公共図書館と大学図書館の違いはあるものの、利用者に図書館を愛してもらうことで、利用者数の増加や利用

図 15 工事の注意を促す掲示物

者による経済面、運営面の支援につなげていくということは、国や館種を問わずに重要なことである。私たち大学図書館員が見習うべき点は少なくない。

まず、図書館がもつ建築や空間としての魅力は、大いに活用すべきだと思う。ニューヨーク公共図書館のように、歴史的な価値、デザインとしての魅力がある建物をもつ図書館は、積極的にアピールすべきだ。とはいえ、魅力的な建築物というものは大学の運営や長い時間の経過によってもたらされるものであり、図書館スタッフが努力をしたからといって簡単にどうにかできるものではない。むしろ特別な建築を持たない図書館が大多数だろう。それでも、工夫の余地はあると思う。館内レイアウトや掲示物の改善は、比較的手のつけやすいところだろう。配架資料の背がそろっていたり、清掃がしっかり行われていたりするだけでも、見た目の美しさは変わってくる。来館したくなるような内観や外観を、できる範囲で作り出すべきである。

次に、図書館の魅力を発信していくことも重要だ。ニューヨーク公共図書館では、観光客向けのツアーを実施したり、オリジナルグッズの販売を行ったりと、外部に向けた魅力のアピールが非常に巧みに行われている。大学図書館としても、積極的に情報を発信することで、認知度の向上や来館者の増加につなげたいところだ。そのためには、職員が自らの所属する図書館について、コレクションやサービスだけではなく、建築や歴史なども十分理解しておくことが不可欠である。

言うまでもなく、蔵書のアピールは重要だ。特に図書館の個性ともなる貴重書は、活用すべきである。ニューヨーク公共図書館は、定期的に展示会を実施するなど、所有する貴重な資料を積極的にアピールし、市民の目に触れる機会を作り出していた。一般的に貴重書は閉架であることが多いため、利用者に認知されにくい。貴重書は、認知され、利用されてこそ価値があるものではないだろうか。展示をしたり、ウェブや SNS で発信したりすることで、貴重書の存在をアピールできると良いかと思う。

そして **Schwarzman Building** の工事のお知らせに見られたような、親しみやすさやユーモアも時には必要ではないだろうか。私は今回、その工事のお知らせを見て、ニューヨーク公共図書館に対して好感を抱いた。他の利用者も、「未来の楽しみのために」と言われ

ば、嫌な気持ちにはならないはずだ。日本では図書館のような公共サービスの場ではいわゆる「お堅い」対応しか許されないような雰囲気があるが、親しみやすさを求めている学生も少なくないように思う。図書館の雰囲気にもよるかとは思いますが、個人的には、真面目だけれどユーモアもある、メリハリのある利用者対応を心がけたい。

8. おわりに

長年の夢であったニューヨーク公共図書館を訪問し、見学ツアーに参加できたことは、大変有意義で貴重な経験となった。国内外の大勢の訪問者で賑わう光景には、図書館という施設がもつ力を再発見できたようで、自分の仕事や図書館の未来に対して前向きな気持ちになれた。

今回はツアーへの参加という観光客レベルの見学にとどまってしまったことは残念であった。この経験を生かし、今後は図書館員として、運営側の視点で海外の図書館の視察を試みたい。

9. 参考文献

- ・ 菅谷明子. 未来をつくる図書館. 岩波書店, 2003, 230p.
- ・ ジェームズ・W・P・キャンベル. 美しい知の遺産世界の図書館. 河出書房新社, 2014, 327p.
- ・ New York Public Library. <https://www.nypl.org/>, (参照 2018-07-25)